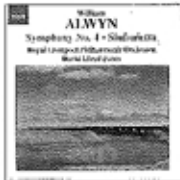


Alwyn, William



アルウィン：交響曲第4番、シンフォニエッタ

デイヴィッド・ロイド＝ジョーンズ指揮ロイヤル・リヴァプールpo
(録音：2004年8月(交響曲)、2005年1月(シンフォニエッタ))
[Naxos] 8.557648

ロイド＝ジョーンズによるアルウィン交響曲全集はこれで完結。今回の第4は1959年の作品で、10年前の第1交響曲構想時から第1を提示部、第2を緩徐楽章、第3をスケルツォ、第4をフィナーレとイメージする計画で進めてきたプロジェクトの最終章でもある。4つの交響曲は「1作」こと異なるスタイルをとる一方、第1で導入された動機はその後の3曲でも活用されていく。第4はこうした位置づけゆえに、完結編としての外向的で力強い性格を持ち、勝利の確信を宣言する作品になった。刻みつけるリズムが強い印象を与える第2楽章のスケルツォに続き、第3楽章のフィナーレは、対照的なゆったりと歌う旋律に始まり、力強いパッサカリアへと発展していく。

シンフォニエッタは70年に完成した3楽章の弦楽合奏曲。引き締まった両端楽章に挟まれた取組的な緩徐楽章にはアルウインを魅了した「ヘルル」からの引用があるが「ここでベルクへの敬意を意図したわけではない」そだった。